2024秋

文理100選

西武文理大学図書館運営委員会
(サービス経営学部)

目次

サービス経営学部生にぜひ読んでほしい本
　まずは読んでみよう！入門編
　さらに読んでみよう！上級編

これは読んでおくべき！古典的名著

最新情報をキャッチアップするために
読んでおくべき本

サービス経営学部生にぜひ読んでほしい本
まずは読んでみよう！入門編

1.『ホスピタリティ概論』　金子章予・編著／学文社

日本語で一般的に使われている「ホスピタリティ」という言葉と英語のhospitalityの意味が少しずれていることを授業でお話ししましたが、しっかりと把握できましたか？すでに買ってくれた学生さん（ありがとうございました！）は、買っただけでなく、チャレンジウィークス内でしっかりと読んでくださいね。残念ながらすでに誤植や間違いが幾つか見つかっておりますが、見つけた人はぜひ金子までご連絡ください。また、買っていない学生さんも、本学の学生さんにとって最低限必要な知識を入れ込んだつもりですので、ぜひ手に取ってじっくりと読んでもらいたいと心から思っています。図書館で借りて読んでみてくださいね！

2.『もったいない主義　不景気だからアイデアが湧いてくる！！』
小山 薫堂／幻冬舎

より良いサービスや企画を考える上でのヒントとなるから。また、日常の視点や思考の仕方も参考となるから。

3.『世界はナラティブでできている』
アンガス・フレッチャー／青土社

ストーリーとナラティブの違いを考えて欲しい。

4.『せいいっぱいの悪口』堀静香／百万年書房

読みやすい。

5.『水中の哲学者たち』永井玲衣／晶文社

哲学が身近になる。

6.『映画を早送りで観る人たち』稲田豊史／光文社

映画やドラマを観るさい、1.5倍速で観たりする風潮が最近はある。なぜ、という気持ちでこの本を手にとった。読み終わっても納得は得られないが、ここに至る時代背景は見えてきたと感じる。

7.『知的複眼思考法』苅谷剛／講談社

社会では「正解のない問題」に取り組まないといけない、だから大学でその力を鍛える。…などとよく言われますが、そもそも何が問題なのか、どうやって問題を見い出していくのかが難しいのです。この本には、問題を見出す力を鍛えるためのヒントがたくさん詰まっています。一度読んで理解して終わる、という読み方ではなく、何度も何度も、折に触れて読み返して欲しい本です。

8.『きみのお金は誰のため』田内学／東洋経済新報社

お金の本質、お金の流れがわかる、お金の教育小説。お金を「稼ぐ」「使う」立場から、お金を受け取って「労働する」側に視点を変換させ書かれた「働くこと」の意味を考えさせられる一冊。「読者が選ぶビジネス書グランプリ2024」総合グランプリ、リベラルアーツ部門賞をW受賞。

9.『帝国ホテルの不思議』村松友視／文藝春秋

直木賞作家である著者が、帝国ホテルの様々な部署で働く30名のインタビューより「帝国ホテルとは何ぞや」を浮かびあがらせた作品。ホテルには実に多くの職種・仕事があることを知るとともに、働いている人たちの思いを知って欲しい1冊。

10.『転職』高杉良／KADOKAWA

日本の経済小説を代表する三大作家のひとりである高杉良の作品。自身の娘婿の実際にあった物語で、大学の野球部出身の若者が、アンダーセンコンサルティング（現アクセンチュア）、P＆G、リーバイス、モルソン・クアーズ、ブルーボトルコーヒーといった異なる業種の外資系有名企業を渡り歩き（転職を繰り返し）、その中でマーケティングスキルに磨きをかけ、実績を積み重ねて成長していく様子を描いています。手軽に読み進めながら、マーケティングの実際と起業家精神が同時に学べる絶好の読み物です。とてもオススメの一冊です！

11.『世界一やさしい「やりたいこと」の見つけ方』
八木 仁平／KADOKAWA

何をやるにも、まずは自分自身を理解することが大事です。自分とはどんな人間なのかを知るための最初の一歩として、好きなこと、できること、価値観などを知るための、ガイドとなってくれる本です。特に今、本当にやりたいことを探している人にはおすすめです。

12.『実践経営哲学』松下幸之助／PHP研究所

パナソニック(旧松下電器産業)グループ創業者の松下幸之助氏が、ささやかな形で始めた事業を、一代にして世界的企業に育て上げた要因を分析し、２０項目にまとめたものです。自らの経営において日々実践し、体得した哲学、考え方、信念が凝縮されています。

13.『前進力：自分と組織を強くする73のヒント』加藤三彦／新潮社

本学加藤三彦教授の著書。サービス経営学部生必読！単行本『努力が結果につながらない人に気づいてほしいこと』を文庫化にあたり改題。

14.『買いたくなる価格には必ず理由がある「値づけの思考法」』
小川孔輔／日本実業出版社

みなさんにも馴染みのある豊富な企業の事例をもとに、多くの利益を上げている企業のプライシングをわかりやく解説している良書です。この本を読むことで、企業はこうして値づけをし、消費者が買いたくなる価格にしているんだ、なるほどと思うことでしょう。

15.『入門マクロ経済学』中谷巌／日本評論社

経済学の標準的教科書。

16.『他者と働く「わかりあえなさ」から始める組織論』
宇田川元一／NewsPicksパブリッシング

インターネットが普及し、たくさんの考えが「わからない」「面倒くさい」ことから逃げることも簡単になってしまったような気がします。ですが、社会に出て、もちろん学校生活・家族・ネット上での対人関係も生きていく中で必要不可欠なものであり、他者との理解の度合いや関係には「わからない」「面倒くさい」ことは切っても切れないものであると考えます。そのマイナスの感情をどのように捉えるのか、どのように考えるのかをこの少しでも考えられる気がします。

17.『勘違いが人を動かす 教養としての行動経済学入門』
エヴァ・ファン・デン・ブルック／ダイヤモンド社

宝くじは滅多なことでは当たらない。しかし買う人は自分だけは当たると信じておそらく帰ってこないお金を払い続ける…。限定版は中古でも溢れているのになぜか買ってしまう。こうした不合理な事実は人間の特性を利用しているという。世の中には自分で選択しているつもりでも、実はそのように仕向けられている仕組みが溢れているのである。

18.『生きのびるための事務』坂口恭平／マガジンハウス

安心してください。漫画です。やってみたいことはありますか？あったけど到底無理と思い込んで忘れてしまいましたか？思い出してみてください自分の夢を。今の自分ではすぐに実現できないからと言って無理と無駄だと決めつけてませんか？「事務」があなたのなりたい自分を具現化するお手伝いをしてくれます。

19.『ランキングマップ　世界地理』伊藤智章／筑摩書房

見開きで、世界地図と様々な項目の国別ベスト（ワースト）１０を掲載。平易は解説と合わせ、世界各国の状況を手軽に把握する、グローバル経済初心者向けの入門書として。

20.『韓流ブーム』桑畑優香／早川書房

韓流ドラマやK-POPが当たり前になった過程や今後の見通しを著者の対話形式で読み解いていきます。

21.『日本人が知らない世界遺産』林菜央 ／朝日新聞出版

2024年佐渡金山が世界遺産登録され観光誘致への期待が高まっていますが、本来世界遺産は観光地のために登録されるものではなく、また世界遺産登録による知られざるマイナスの効果もあります。世界遺産を冷静にとらえるために一読をお勧めします。

22.『海の向こうでニッポンは』井上章一／平凡社

インバウンドの観光客数が記録を更新する勢いで流入していますが、海外から見た日本のイメージは江戸、明治期からどのような展開をたどってきたのか、インバウンド観光客の嗜好をとらえていく基本的な教養にもなります。

23.『自動車の世界史』鈴木均／中央公論新社

経営学、といえばまずその導入として、フォード、そして日本のトヨタといった自動車会社が挙げられます。その自動車について、T型フォードからEV隆盛の現代までを世界的な自動車市場の展開とともに紐解いていきます。

24.『日本人の愛したお菓子たち　明治から現代へ』
吉田菊次郎／講談社

私たちが初めて主体的に「消費者」となるのは、3歳、4歳のころ「お菓子」を買った時ではないでしょうか。消費の原点ともなるお菓子は、明治からどのようなものが市場で売れてきたのか、マーケティングの対象の変化も読み取れる、経営学をちがったアングルからとらえられる本です。

25.『韓国は日本をどう見ているか』金暻和／平凡社

一人当たりGDPで日本を抜いてしまった韓国ですが、韓国は日本をどのようにとらえてきたのか、韓国のメディア人類学者が、韓国からの視点で日本社会を分析します。

26.『シティ・ポップ文化論』日高良祐／フィルムアート社

日本の1970年代～80年代の「シティ・ポップ」が、2010年代末に世界的に注目されるようになり、その流れは日本に逆輸入されてシティ・ポップが見直されています。シティ・ポップはなぜ最近世界で「刺さる」ようになったのか、あの時代なぜシティ・ポップが流行したのか、大学の講義を編集した本書が解き明かしていきます。

27.『いわゆる「サザン」について』小貫 信昭／文藝春秋

70年代末から若者を惹きつけ続けてきた「サザンオールスターズ」、そのリーダー桑田佳祐がバンドを組むきっかけとなる青山学院大学入学からちょうど今年で50年。紛れもなく日本を代表してきたバンド「サザン」とは何か、を解き明かしていきます。エンターテインメント・ビジネスとしての音楽を考える一助にも。

28.『国際情勢でたどるオリンピック史』村上直久／平凡社

2024年パリオリンピックは、大きなアクシデントはなく閉幕しましたが、1940年の東京オリンピックが「返上」されたりと、オリンピックはテロや戦争に翻弄されてきました。オリンピックが映し出す国際関係のリアルな世界が浮き彫りになります。

29.『空と風と時と』追分日出子／文藝春秋

75歳を超えても全国ツアーを挙行した、日本を代表する「ニューミュージック」の旗手だった「オフコース」を率いていた小田和正の評伝。日本の70年代、80年代音楽が見直される中で、当時から変わらぬ人気を博すミュージシャンとそれを支えていた人たちの姿から、日本の音楽業界の側面も伝わってきます。

30.『帝国ホテルと日本の近代』永宮和／原書房

帝国ホテルの改修計画が出され、2036年に新本館がオープンする予定ですが、帝国ホテルというと2代目の「ライト建築」が今なお光彩を放っています。このライト建築の時代の帝国ホテルを振り返り、ライト建築の帝国ホテルから日本の近代を照射していきます。

31.『日韓スタディーズ ①　新たな研究と学び』
山本浄邦／ナカニシヤ出版

皆さんはおそらくK-POP、「プルゴギ」に囲まれた世代、韓国文化を違和感なく受け入れていることでしょう。しかし２０世紀までは日韓の交流にも様々な障害・バリアがありました。その変容を様々な分野から分析し、両者の共生を目指すことを狙いとした書です。

32.『百貨店の戦後史』夫馬信一／国書刊行会

通販での買い物が当たり前になってしまいましたが、昭和～平成のはじめまではデパートが消費の「お城」のような存在でした。近年地方を中心にデパートの閉店、倒産が相次いでいますが、そうした地方での百貨店の盛衰を丹念に調査した書物です。百貨店という業界、消費行動の分析の基礎としても役立つ良著です。

33.『堤康次郎－西武グループと20世紀日本の開発事業』
老川慶喜／中央公論新社

私たちの大学の地元を開発した西武の創始者、堤康次郎の一代記。滋賀・近江商人の系譜から、不動産開発とその手段としての鉄道網の経営、そして流通へと展開した西武の歩みを分析しています。

34.『日本のグラフィックデザイン百五十年』(別冊太陽)　平凡社

広告の分野では、ネット広告全盛の現代ですが、ビジュアルに商品やサービスを消費者に訴求させていく手段の一つが、伝統的にはポスター広告でした。このポスター広告を明治期から現代まで振り返り、代表的なポスターデザイナーにも斬り込んでいきます。

35.『温泉旅行の近現代史』高柳智彦／吉川弘文館

欧州にも温泉地はありますが、バーデンバーデンのような社交場として発達した事例もありますが今なお「湯治」が主目的です。一方で日本では、湯治もあるものの、近現代は旅行の目的地として発展していきました。旅行として楽しむ目的地としての温泉地の発展・展開を解読していきます。

36.『会計の世界史』田中靖浩／日本経済新聞出版社

簿記、財務会計、管理会計＆ファイナンス・・・これだけみると頭が痛くなってしまう会計ですが、本書は世界史や文化芸術と組み合わせてやさしく、興味深く説明してくれます。ルネッサンス期にイタリアで生まれた簿記、19世紀の産業革命～鉄道が敷かれたイギリスで財務会計、20世紀アメリカの投資とバリュー思考。経済の覇権の歴史と会計は切り離せないと気付きを与えてくれます。ただ経済を学ぶだけではなく、旅したくなる１冊です。

37.『9割の損は行動経済学で避けられる』橋本之克／経済界

行動経済学は心理学と経済学を融合した学問で、人間の非合理な判断や行動を分析します。本書で筆者は、日常生活の様々なシーンを例に、正しい決断やチョイスするにはどんな術を持つべきなのか教えてくれます。人は「損失」よりも「後悔」を避ける傾向があり、後悔は単なる損失だけではなく、自分で決めたという意識が残り、心理的ダメージが大きいそうです。それは分かりますが、旅行・観光はすべてが合理的にはいかないもの。だから宿題を残してリピートしたい思い入れのあるまちだって生まれる。そんなことを考えながら、失敗しない行動経済を読むのもおすすめです。

38.『エンタメビジネス大全』中山淳雄／日経BP

サービス業のうち、インバウンドの観光客にも注目されている、出版も含めた広義のエンターテインメント・ビジネスの日本での展開を、アニメ、テレビ、漫画、ゲームなど各トピックごとにまとめたもの。日本のエンターテインメント・ビジネス界の全容を手軽に掴める。

39.『パスポート学』陳天璽 他／北海道大学出版会

コロナ禍が一段落し海外旅行に向かう人も増えてきましたが、その時に必要となるパスポート、日本のパスポートは、パスポートだけで海外旅行に行ける国が最も多い便利なパスポートだと知っていますか？世界には、その国の情勢によってパスポートのほかにビザを必要とする国、国籍がないためにパスポートが発給されない人、国の独立でそれまでのパスポートが突然使えなくなる、など、日本人のパスポート感とはことなる事例がたくさんあります。観光の仕事に携わる人には、特に読んでほしい一冊です。

40.『現代ベトナムを知るための63章【第3版】』
岩井美佐紀／明石書店

サービス経営学部の留学生の2番目に多い出身国ベトナムを、歴史、文化、食などの身近なテーマから、政治、経済、民族など社会科学のテーマまで幅広く概説しています。

サービス経営学部生にぜひ読んでほしい本
さらに読んでみよう！上級編

41.『「都市主義」の限界』養老孟司／中央公論新社
42.『ものがわかるということ』養老孟司／祥伝社
43.『ヒトの幸福とはなにか』養老孟司／筑摩書房

著者は「都市以外の場所で一定期間過ごす」を提唱している（「現代の参勤交代」、「二地域居住」）。その現代的意義を理解できる。養老孟司先生の３冊を推薦します。

44.『観光立国・日本　ポストコロナ時代の戦略』箱谷真司／光文社

朝日新聞社の記者で様々な取材をしてきた著者が、コロナ後の観光業界の変化や生き残り策を上げて考察している。

45.『新・観光立国論【実践編】世界一訪れたい日本のつくりかた』デービッド・アトキンソン／東洋経済新報社

イギリス人金融アナリストで、日本の観光・文化財・経済政策の専門家である著者による、国際観光客18億人の「大観光時代」を迎えると言われる世界で、日本が「観光立国」として勝ち抜くための実践的提言。2017年発行の1冊であるがコロナ渦を経て実際に現在の日本の観光がどのように推移してきたかの答え合わせをしながら読むのも興味深い。

46.『数理モデル思考で紐解くRULE DESIGN　―組織と人の行動を科学する―』江崎貴裕／ソシム

法律や条例といった社会のルール、組織のマネジメントにおけるルール、家族や恋人、友人の間で取り決めたプライベートなルールなど、世の中にはたくさんの「ルール」が存在します。本書では身近に存在する様々な「ルールの失敗」に焦点を当て、なぜ失敗したのかを“数理モデル思考”という切り口から分析され、うまく機能するためのルール作りのヒントが紹介されています。ビジネスだけでなく、社会やプライベートでのルール作りに興味のある方はぜひ読んでみてください。ちなみに数式は一切出てきません。。

47.『ブランディングの科学 誰も知らないマーケティングの法則11法』バイロン・シャープ／朝日新聞出版

従来から言われてきたマーケティング理論や常識を再検証し、新しい視点でマーケティング、ブランディングについて新しい提案がされています。刺激的で面白い本です。

48.『模倣の経営学　偉大なる経営者はマネから生まれる』
井上達彦／日経BP

実は、みなさんが良く知っているグーグルやアップル、マイクロソフト、スターバックスといった今でも世界有数の巨大企業もある模倣から生まれています。日本企業でも、任天堂やセブンイレブンも同様です。このように意外な手本は、近くにあったり、異なる世界にあることも多く、それらの事例を通して模倣の重要性を説いている良書です。世界でも中国、韓国、台湾、タイなどでも翻訳されているベストセラーです。

49.『資本主義と自由』ミルトン・フリードマン／日経BP

シカゴ学派の論客であるフリードマンの主著の一つ。

50.『語り継がれる 人類の「悲劇の記憶」百科図鑑』
ピーター・ホーエンハウス ／原書房

チェルノブイリ原発やアウシュビッツにとどまらない、人類の歴史の負の側面を見分する、ダークツーリズムの目的地を考えるきっかけになります。

51.『文化財の未来図』村上隆／岩波書店

川越に記録的なインバウンドの観光客が訪れていますが、地元の町並み保存の並々ならぬ努力があってこそです。観光資源だけにとどまらず、文化財をどのように保存していくのかを考えていくきっかけに。

52.『再編！世界の航空会社』谷川一巳／交通新聞社

1980年代からの世界的な航空自由化で、LCCなど新たなサービスも展開する一方、国を代表していた航空会社の破綻や、経営統合、アライアンスの形成などが目まぐるしく展開しました。この世界の航空ビジネスの潮流をコンパクトにまとめています。

53.『英語の発音と綴り』大名力／中央公論新社

英語の学習でつまずく原因の一つに、発音とスペルが一致しないこともあるのではないでしょうか。無いようで実はある、英語の発音と綴りの関係を丁寧に解説しています。

54.『商人の世界史』玉木俊明／河出書房新社

商業の世界的な展開を、それぞれの時代の「革命的」な動きから解明していきます。経営学を学ぶためにも、そもそも商業とは、と考えていくきっかけに。

55.『「経済効果」ってなんだろう？』宮本勝浩／中央経済社

卒業研究（論文）をまとめるときにも、よく「〇〇の経済効果」を考えたり、紹介することがあるでしょう。しかしその経験効果はどのように「作成」されるのでしょうか。数字のトリックに騙されないためにも、経済効果とはいったいどのような数字なのか、本書で確認していきましょう。

56.『サステナビリティの経済哲学』松島 斉／岩波書店

SDGs は言葉としてはすっかり定着した感がありますが、そもそもそのSに当たる、サステナビリティとは何なのでしょうか。経済の観点からの「S」の意味を追求していきます。

57.『近代日本の身体統制』垣沼絢子／人文書院

日本を代表する舞台エンターテインメント・ビジネスである「宝塚」。タカラジェンヌは昭和初期から女性のあこがれの存在でもありますが、身体を「曝け出す」レビューに対して日本社会とハレーションを起こしたことも事実です。宝塚のレビューはどのように受け入れられ、また統制されていったのか、歴史的展開から日本のエンターテインメント・ビジネスを異なるアングルから分析しています。

58.『新幹線全史』竹内 正浩／NHK出版

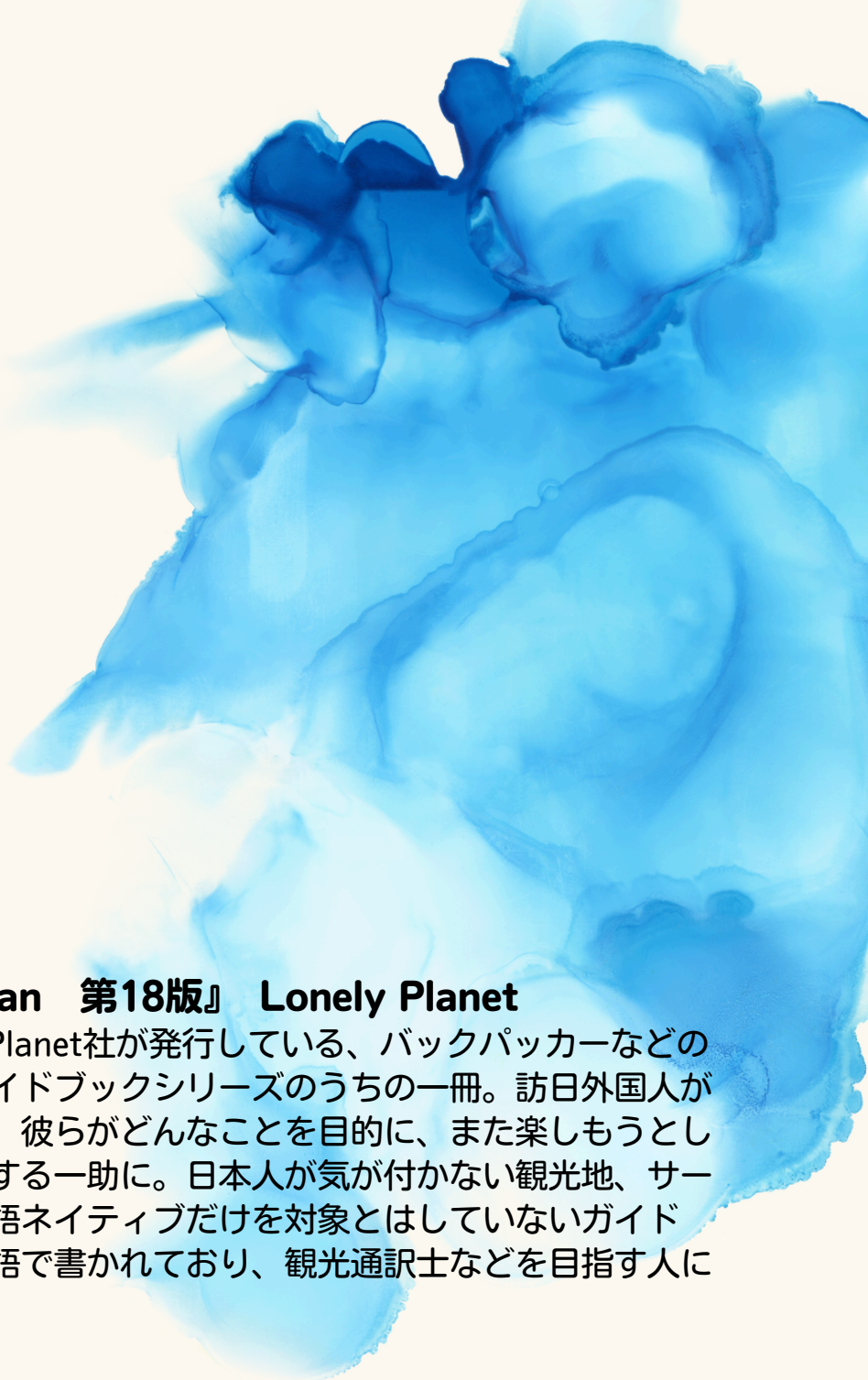
2024年3月、北陸新幹線が福井県・敦賀まで延伸しましたが、その先、京都を経て大阪までの全通は見通しがたっていません。そこには敦賀から先の「地形」が影響しています。本書は、新幹線のこれまで、そしてリニア新幹線の開通への展望を、地形の観点からみていきます。交通サービスとしての新幹線を、どのようなネットワークとして構築していくのかを考えるきっかけに。

59.『山の観光史』高嶋修一／日本経済評論社

富士山や高尾山のオーバーツーリズムが問題となっていますが、修行等でなはくレジャーとして手軽に山に登れるようになったのは、山へ簡便にアクセスできる交通の発達とも関連していました。山が観光地となっていく歴史的展開を説く書です。

60.『箱根の開発と渋沢栄一』武田尚子／吉川弘文館

1万円札の新たな顔となった渋沢栄一は、多方面で実業により成功した人物ですが、彼と日本を代表するリゾート地・箱根との関係を、膨大な資料から丹念に読み解いていきます。意外にも、箱根で当初は牧場の経営からスタートしています。



61.『Lonely Planet Japan　第18版』　Lonely Planet

オーストラリアのLonly Planet社が発行している、バックパッカーなどの低予算の旅行者向けのガイドブックシリーズのうちの一冊。訪日外国人が爆発的に増えていますが、彼らがどんなことを目的に、また楽しもうとして来ているのか、を理解する一助に。日本人が気が付かない観光地、サービスが見つかるかも。英語ネイティブだけを対象とはしていないガイドブックなので、平易な英語で書かれており、観光通訳士などを目指す人にも有用です。

62.『菊竹清訓 東光園』斎藤信吾 他／建築資料研究社

鳥取・皆生温泉に聳える、ホテル東光園。日本のモダニズム建築の巨匠・菊竹清訓により60年前に建てられたもので、鳥取・米子市の海岸近くになぜこんな力強い建築が？と思わせる圧倒的迫力のあるデザインのホテルです。それでいて、庭園も含め、くつろげる空間が広がります。おもてなし、とは異なった、お客様を迎える「建築」の観点からホテルをとらえる材料になるでしょう。（私も泊った経験がありますが、もちろん、おもてなし、もしっかりしていました。）

これは読んでおくべき！古典的名著

63.『三太郎の日記』阿部次郎／KADOKAWA

この本は、八巻学長より私の授業の中で推薦された本です。大正・昭和期の学生の必読の書として現在の多くの大人が読み、人間存在の本質について考えました。角川選書創刊第1号であった『三太郎の日記』が現代の悩める学生のために、創刊40周年記念として平成20年に復刊されたのが『新版　合本三太郎の日記』です。この中で三太郎は、自分が何であるかを知ることと教養とは、自らの意識的努力を命じる一つの規範だと言います。そして、私たちの目標とする教養の理想は、心的宇宙的生命と同化することだと断言します。皆さんは「教養」をどのように定義し、その理想をなんだと考えていますか？

64.『疑え、常識。』川口淳一郎 ／ベストセラーズ

著者は、JAXAであの惑星探査機「はやぶさ」の責任者として有名になった研究者である。その柔軟で芯の強い発想が、日本の宇宙開発に発揮されたことがわかる本である。

65.『道をひらく』松下幸之助／PHP研究所

パナソニック(旧松下電器産業)グループ創業者の松下幸之助氏が自身の体験と人生に対する深い洞察をもとに綴った短編随筆集です。1968年以来、発行560万部を超えて現在まで読み継がれています。私のこれまでの50年と少しの人生の中で、自信を失ったとき、進むべき道に迷ったときなどに、大きな支えとなってくれた本です。
「道」「素直に生きる」「縁あって」の３篇だけでも是非一読頂きたいです。

66.『「文理佐藤学園」という物語―ホスピタリティ教育をもとめて』佐藤英樹／筑摩書房

学園は今年創立60年。すでに多数の学園卒業生が様々な分野で活躍されていて思いがけないところで文理出身者と出会います。その全員に共通の文理のアイコンが、この本の著者で学園創立者である佐藤英樹名誉理事長です。一人のアントレプレナーの一代記としても楽しめる一冊。
卒業してから懐かしく読むのもありです。

67.『太郎物語　高校編・大学編』曽野綾子／新潮社

約50年前の青年・太郎と共に「生きる力」を見つけよう！

68.『ロボット(R.U.R) 』カレル・チャペック／岩波書店など

ロボットの語源となったチェコの戯曲。AIの時代を迎える現在、100年余り前の戯曲で描かれた、「人造人間」が活動する世界が妙にリアルに感じられます。

69.『江戸名所図会』　筑摩書房 角川書店ほか

商人をはじめ豊かな階層が生まれると、旅に出たくなるのは世の常。江戸の名所を、図版をふんだんに取り入れた江戸時代のガイドブック。現在の様子との比較の旅に出ても面白いはずです。姉妹版？の京都を紹介する都名所図会もいっしょに。

70.『福翁自伝』福澤諭吉／岩波書店ほか

1万円札の肖像画から引退した諭吉ですが、彼の人生は慶應義塾の創設以外に、あまり知られていないままではないでしょうか。幕末から明治、当時としては大柄な諭吉が、誇張はあるかもしれませんが、現代からみると案外破天荒な生き方を貫いており、軽妙な口語表現の文体で一気に通読できる自叙伝です。

最新情報をキャッチアップするために
読んでおきたい本（ジャンル不問）

71.『コソボ　苦闘する親米国家
**　ユーゴサッカー最後の代表チームと臓器密売の現場を追う』**
木村元彦／集英社インターナショナル

現在の混迷化した世界状勢の現状と裏側を知りたい人はぜひ一読ください。

72.『やり抜く力GRIT―人生のあらゆる成功を決める
「究極の能力」を身につける』
アンジェラ・ダックワース/ダイヤモンド社

社会に出る前に身に付けておきたい資質であるから。また、社会に出てからも非常に重要な資質であるため。

73.『日経業界地図　2025年版』日本経済新聞出版

様々な業界の最新動向や課題など、あるいは業界の主要企業などがまとめられており、就職活動に役立つ情報が満載なのでぜひ手に取って読んでもらいたい。

74.『成瀬は天下を取りに行く』宮島未奈／新潮社

主人公の成瀬は強烈な個性を持つ女子高生。周りになんと思われようと自分の信念を貫く姿が爽快で元気をもらえます。

75.『カワイイエコノミー』稲垣涼子／日経BP

日常の会話でよく使われる「カワイイ」という言葉を、ヒット商品の背景の一つとして取り上げ、考察した本です。消費者のニーズを捉える上で参考になります。

76.『9冠無敗 能代工バスケットボール部 熱狂と憂鬱と』
田口元義／集英社

伝説の能代工業高校バスケットボール部と加藤三彦監督が主題の、スポーツノンフィクション。「日本一」とはどういう水準なのか、「日本一であり続ける」とはどういう次元の話なのか、を垣間見ることができる、感動の一冊です。

77.『ルポ新大久保』室橋裕和／角川書店

世界でも有数の多国籍タウン・新大久保に実際に暮らした著者によるルポ。日本人と外国人の共生、外国人同士（ずっと住んでる外国人と後から来た外国人）の共生について考えさせられます。COVID-19が流行り始めた時期の刊行のため、情報の鮮度は若干落ちますが、これを読んだ後は是非、新大久保を歩いてみてほしいです。

78.『エシックス経営: パーパスを経営現場に実装する』
名和高司／東洋経済新報社

企業経営の根幹をなすミッションから、ビジョン、そしてパーパスへと時代とともに新しい経営思想へとシフトする中、それらを実践する基軸として、エシックス（倫理）が現代経営に強く求められている。持続的な企業の成長と持続可能な社会の実現に必要不可欠になりつつある新しい経営思想について論じられている最新刊（2024年９月にでたばかりの本）です。ますますこれからの企業経営では、エシックス経営が必要になってくることでしょう。

79.『AIの経済学 「予測機能」をどう使いこなすか』
鶴光太郎／日本評論社

AIとの向き合い方が皆さんの将来にとって重要。

80.『ほったらかし投資術』山崎元／朝日新聞出版

困ったときのために貯金をしといた方がいいと言われてもそんな余計なお金ないしつまらない…。という人に読んでほしい本、早ければ早いほどいい。資産形成は欲を張らなければシンプルであることを教えてくれる。わからないことがあれば、幸い学校にはプロの先生がいるのだから相談できるのでは。関連する授業も興味が持てます。

81.『同志少女よ、敵を撃て』逢坂冬馬／早川書房

ソ連の女性狙撃手の物語。第二次世界大戦中の話ですが、現在も世界中で起こる紛争や戦争についても考えさせられる。何のために戦うのか。なぜ戦わなければならないのか。

82.『戦争は女の顔をしていない』
スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ／岩波書店

「同志少女よ、敵を撃て」と一緒に読むことをおすすめします。戦争に参加した大勢の女性からのインタビューをまとめた本です。それぞれ短いことばで語られていますが、その前後は想像を絶する日々だったと想像されます。ひとりひとりの人生に思いを馳せて読んでください。

83.『複数国籍』佐々木てる／明石書店

グローバル化が進むことで婚姻もいわゆる「国際結婚」も珍しくなくなりましたが、その際、異なる国籍どうしの親から生まれた子女や、国籍付与が出生地主義か血統主義か、によって二重、三重の国籍をもつことになる「複数国籍」が問題となります。日本は単一国籍しか認めておらず、成人時に国籍を選択・放棄しなかった二重国籍の国会議員が問題となりました。グローバル化の否応なしの進展の中でこの複数国籍をどう考えるか、世界の事例もふんだんに取り入れられています。

84.『弱い円の正体』唐鎌大輔／日経BP

2011年、円はドルに対して戦後最高値の1ドル75円台だったのが、2024年には1ドル160円を超えるというドル高円安になりました。なぜわずか10年余りでこれほど円が弱くなったのか。訪日外国人には「爆安」な観光地となった日本の背景を、円安の構造的要因から解き明かしていきます。

85.『金利を考える』翁邦夫／筑摩書房

2000年代の日本は金利がゼロの世の中となり、一般の人には「金利」の概念も感覚も「ゼロ」だったのではないでしょうか。2024年になり、金利がプラスに変わりつつある中、そもそも金利とは、を、元日本銀行のエコノミストの著作を通じて考える基礎となります。

86.『女帝のいた時代』つげのり子／自由国民社

現行の皇室典範では、皇統はこのままだと悠仁親王に限られていきます。女系天皇への道筋も議論となる中、過去の日本の「女帝」を分析、「女性天皇」への議論の基礎に。

87.『天皇家　250年の血脈』つげのり子／KADOKAWA

なぜ日本では「天皇」は歴史の変動、転換があっても受け容れられ続けてきたのか、国民と天皇の関係を、江戸時代の光格天皇からの歴史的な展開から解き明かしていきます。

88.『京都　未完の産業都市のゆくえ』有賀健／新潮社

オーバーツーリズムの代名詞となった京都、しかし京都は古都の半面、清水焼や西陣織の伝統工芸、そして世界的企業任天堂や京セラ、村田製作所が誕生した産業都市でもあります。ある意味、京都が産業都市、住宅地、観光地のすべてがいずれも都市計画として「未完」であり、それゆえオーバーツーリズムを招いているともいえます。この「未完」の京都を分析して、京都の今日の課題を明らかにします。

89.『異次元緩和の罪と罰』山本謙三／講談社

皆さんは「金利」を実感したことがありますか？お金を預けても「増える」という感覚は生まれたときからなかったでしょう。それは日本の異常な低金利、ゼロ金利、マイナス金利によるものです。これがなぜ起きたのか、そしてそれが変わりつつある現在、どのようなことが想定されるのか、日銀政策担当者だった著者からの警鐘を鳴らす書です。

90.『ジョークで読むロシア』菅野沙織／日本経済新聞出版社

ウクライナ侵攻で国家イメージが大きく棄損したロシアですが、その国民の生活を垣間見る、社会性にあふれたジョーク集。ブラックユーモアに満ちた、皮肉たっぷりのジョークにロシア庶民のしたたかさも読み取れます。

91.『右翼ポピュリズムのディスコース　第2版』
ルート・ヴォダック／明石書店

2024年アメリカ大統領選挙では、トランプ大統領の再選が取り沙汰されていますが、彼もポピュリストとされています、グローバル化から取り残された、またその流れで生じた異文化との摩擦などから、欧米諸国で「大衆迎合主義」とも訳されるポピュリズムの潮流、ポピュリストの政府が各地で誕生しています。そのポピュリズムの世界での展開を複眼的にとらえ、その対応への示唆を含む書物です。

92.『持続可能な交通まちづくり』宇都宮浄人／筑摩書房

高齢者の運転ミスでの事故が増え免許返納への圧力がある一方、公共交通ではバスの運転手不足が深刻化し減便などサービス低下が話題となっています。どうすると、地域は、交通機関によって支えられる町として維持できるのか、欧州の事例を比較対象として考えていきます。

93.『金融DX、銀行は生き残れるのか』遠藤正之／光文社

昨年、大手金融機関のシステム障害がちょっとした日本経済への混乱を招きましたが、銀行のDX化への不安材料にもなりました。低金利で収益が悪化した銀行業界に、コスト削減等でDXはどのように活用できるのか、将来の銀行像を考えていきます。

94.『中国という捏造』ビル・ヘイトン／草思社

尖閣諸島、台湾海峡、沖ノ鳥島、と、日本の周囲を脅かす存在感を誇示するようになった中華人民共和国ですが、共産党がその支配や行動を正当化するため、歴史等を「いかに捏造してきたか」を丹念に説き起こしています。中国指導部の行動原理を理解するために一読してみましょう。

95.『半導体戦争』クリス・ミラー／ダイヤモンド社

1980年代、日本の「お家芸」だった半導体製造、すっかり台湾等に打ちのめされて、通産省のテコ入れもなかなか成果がでませんでしたが、最近の円安もあって熊本や北海道等への「回帰」も起きています。産業のコメ、とも呼ばれた半導体ビジネスの世界的な展開を知ることで、その裏にある国家間の攻防も垣間見ることにつながります。

96.『感染症の歴史学』飯島渉／岩波書店

新型コロナがやや落ち着いた時点でみると、人類の歴史は、ペスト、天然痘、マラリアなどグローバルな感染症との闘いのそれでもありました。新型コロナのパンデミックを踏まえて、これまでの世界的な感染症の流行を俯瞰し、今後への教訓を探ります。

97.『実験の民主主義』宇野重規／中央公論社

衆議院選挙、アメリカ大統領選挙、と選挙が続く年ですが、19世紀以来の投票による民主主義という実験が、デジタル社会でどのような方向へと向かうのか、民主主義の実験の展望を描きます。

98.『セゾン　堤誠二が見た未来』鈴木哲也／日本経済新聞社

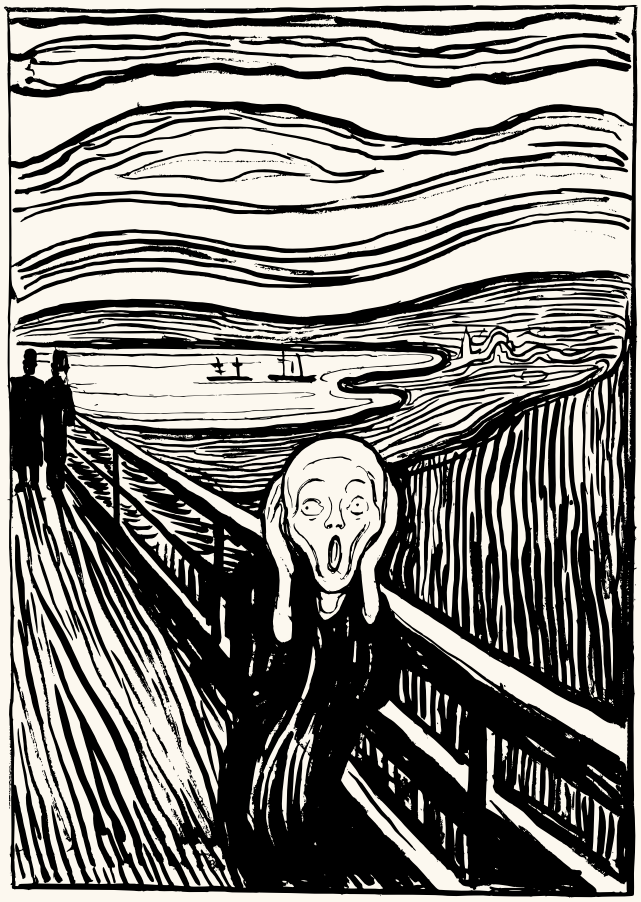
昨年発表された西武百貨店池袋店の大幅な改装は、日本一の規模を誇った同店の栄枯盛衰の幕引きでもありました、その西武の流通部門をけん引した、堤清二とセゾングループについての評伝です。

99.『ロシアの眼から見た日本』亀山陽司／NHK出版

ロシアのウクライナ侵攻から2年半以上が経過、非友好国として日本への領空侵犯などの挑発も行われています。そのロシアから我々はどのように守るべきか、ロシアの視点から考えます。

100.『中央銀行デジタル通貨』下田知行／秀和システム

キャッシュレスがコロナ禍を経て日本でも普及してきましたが、日本銀行の発行する紙幣が、デジタル化される可能性はあるのでしょうか。中国では既に始まった、中央銀行デジタル通貨について、電子マネーや「仮想通貨」との違い、メリット・デメリット等を平易に解説しています。



西武文理大学
図書館運営委員会
(サービス経営学部)
2024.秋